東京だんだん会隠岐の旅

六期　小林茂光

東京だんだん会の仲間九人で今春、隠岐・松江を三泊四日の旅をした。

東京だんだん会の事

初耳であろうこの「東京だんだん会」の紹介をさせて頂く。東京双松会報第五号の会長挨拶文の末尾に松高一期生の皆さんが親睦を深める為に「隠居村」なる集まりを結成されたと紹介されていた。

「東京だんだん会」もスタート時は二期中心の集団だったがその後、僅かずつ若返りが進行しつつある。七十歳を超えると極端に同期会も参加が減って来るので、会を維持して行く為に、二期の皆さんは年次の近い気心の知れた仲間にも声を掛けられた。

それと二〇〇七年秋、東京双松会総会でバレー部の歴史を発表する事になった時バレー部に在籍した仲間でその前年から準備し松中バレー部創部以来の歴史資料を作成して**「松江高校バレー部の歴史」**の発表をスライドでさせて戴いた。松江中学にバレーを導入した昭和五年から始まる日誌、写真、戦績資料等からピックアップして載せて配布したもので、資料作成には二年余の取材期間を費やし、二期の石原道央氏を中心に、県女時代のバレー部先輩にも声を掛けて、日本橋島根館隣接のレストラン『主水』などで協議や会食を続けながら仕上げて行った。

此の会食に参加した仲間が二期の有志の方々のグループに加わり「東京だんだん会」に育って来た。

目下登録会員は三十余名弱でまだ広く募集中です。ご興味のある方はお声を掛けてください。

春の花見シーズン、暑気払い、忘年会など年に三回程懇親会を開き、主会場は日比谷の鹿鳴館の在った場所の地下で集まっています。

今、好評連載中のＮＨＫドラマ『マッサン』こと、竹鶴政孝氏が育てたニッカウヰスキーが経営するレストラン『ウスケボー』が定例会の会場です。ウスケボーとはケルト語で命の水つまりウヰスキーを指すのです。

会員に二名の隠岐出身のメンバーが居る事もあり隠岐の話題が例会でしばしば出て来て隠岐旅行に発展、九名で実施したものです。

卒業後、松江を離れ縁遠くなった人も少なくない。松江からは僅かの距離だし当時は同学年に大抵隠岐出身者も在学していたのに、その頃は気軽に旅を楽

しむ風潮は無く生徒の懐も余裕がなく自家用車もまだ学生には縁遠い存在で隠岐だけでなく、津和野、石見銀山、三瓶の埋没林なども訪ねていない人が多い。

今回隠岐の現地で入手したパンフレットに**★世界ジオパークの隠岐へ行ってこそしまね人★自然と歴史と人情の世界認定の島へ**…と書かれていた。

ジオパークは地球科学的に見て重要な自然遺産を含む自然に親しむための公園との事。

隠岐は日本で六番目の世界ジオパークに昨年認定されたことは、島根県が発行する県ＰＲ誌シマネスクで知ってはいたものの、隠岐の土地が大陸と地続きであった事や、日本列島とも地続きであった事、隠岐諸島が大噴火の火口の外輪山部分を残して海中に埋没して形成された事など、地質学に興味ある事実が見られ、独自の生態系、歴史、文化的にも貴重と認められた事が認定の要素で在る事は今度の訪問で初めて知った。

日本全国に世界ジオパークが六ケ所、日本ジオパークに二十七ケ所、それに今、日本ジオパークを目指している地域が十六ケ所あって、島根では**出雲地区**もその中に含まれています。宍道湖、中海、島根半島の複雑な海岸線、古都の歴史と文化など有する出雲地区は有望ではなかろうかと思えます。

隠岐二泊松江一泊の旅

今回、隠岐二泊は団体で行動し、松江の一泊は幾つかのグループや個人で行動し、帰京便の出雲空港でまた団体の行動となりました。隠岐での旅程で効率よく見学する為に、羽田発七時四十分と早い便にしました。出雲空港での待ち時間もわずかで正午には隠岐空港へ到着し島後観光が開始出来ました。出雲から隠岐空港へは中型のプロペラ機が就航しており、プロペラ機は久々の経験であった。

観光案内で利用したタクシーは島後も島前も九人乗りのジャンボタクシーが最大定員。九人で観光を実施した我々には個人負担の単価面で好都合だった。

最初に重要文化財、宇治川の先陣争いの高綱を遠祖とする古民家佐々木家住宅を訪ね、律令以来の駅鈴を保存している億岐家や玉若酢命神社の前は素通り国分寺跡を訪ねた。当時の歴史書「増鏡」には後醍醐天皇の行在所が隠岐国分寺であったと記されている由。後醍醐天皇の行在所跡と云う施設もあるし国分寺側にも大切なセールスポイントで譲れない。

学者間でも論争がある。後に西ノ島別府にある黒木御所跡を訪ね解説受けると、私にはどうも西ノ島こそが、後醍醐天皇行在所と思われた。

島後では国分寺を訪問した後、隠岐白島海岸を遠望する所まで行った後、昼食だけの為に西郷へ帰った。島後は予想外に大きい島で、豊かな自然は楽しめたが、午後の到着と昼食を摂る為に西郷まで再び帰った事など何かと歯車がかみ合わず充分な観光時間が取れず、残念ながら沢山の施設を見残したままのスケジュールで翌朝には島前へ移動した。

だが夜は海の幸と地酒を充分に楽しめた。

島後・西ノ島・中ノ島で各一回ジャンボタクシー観光をしたが、正直な感想を言えば、島前二島のガイドさんには恵まれたものの、島後は同乗するだけで踏み込んだ解説もなく、期待外れのガイドだった。

翌日の朝食を終えると、ホテルの勧めもあって急遽、本土からのフェリーで島前へ移動、船引運河、由良姫神社、摩天崖、赤尾展望所、碧風館、観音岩、国賀海岸、通天橋、西ノ島故郷館など盛沢山の名所の案内受けた。

歴史、地理、其の他万般に博識なガイド氏は後醍醐天皇の行在所に関し増鏡の記載には否定的で西ノ島黒木御所説を支持して、説得力があった。昨日昼食に苦労したことから、予約して置いたので、昼間から焼き岩牡蠣、刺身、カレイ、鯛の姿焼など和室の家庭的雰囲気につつまれて海の幸を堪能出来た。

別府港は到着早々大雨に見舞われたが、観光協会が全員分の傘を用意してくれたし、事務所にはニュージランドのロトルアから隠岐の自然に魅せられて定住し、隠岐の人に嫁いだブロンドの女性が達者な日本語で親切に世話を焼いてくれた。ガイド兼運転手、観光協会事務所、海の幸の三食など西ノ島を満喫し、分刻みのスケジュールで翌日は後鳥羽上皇が十九年を過ごされた中ノ島（海士町）へも渡る事になる。

隠岐諸島は後鳥羽上皇や後醍醐天皇の他にも剛毅で多才な小野篁も一時流刑を受けた流刑地でもある。流刑は当時律令で定められた五刑「笞・杖・徒・流・死」の内では死に次ぐ重刑である。さらには流刑にもランクがあって、隠岐は伊豆、佐渡、土佐と共に遠流の刑場で最も重い流罪である。各国司に監視させ期限は赦があるまでの無期限とされた。現在の感覚では、隠岐諸島は島根半島から指呼の間なのであるのだが…。

後醍醐天皇は伯耆（ほうき）の国の豪族、名和長年の助けで隠岐を脱出され、短いながら建武の新政を敷き結果はとも角、吉野朝として再度のデビューを果たされた。それには二度の元寇で幕府の力は地に落ち、国中の武士に不満が充ちて後醍醐帝シンパが多かった事にもよるであろう。百十年前の承久の変の当時は北条義時の権力が確立したばかりの充実した時であった。後鳥羽上皇のお世話は土地の有力者村上家で、上皇はこの地で配流十九年の後、崩御された。配流されてのちも歌道は続けられ、隠岐本新古今集が成った。

我こそは　新島守よ　沖の磯の
荒き潮風　心して吹け

など、この島へ来られてからの作品も多い。上皇の歌は小倉百人一首には九十九番に入っており、次の歌である。

人もをし　人もうらめし　あじきなく
世を思ふゆゑに　物思ふ身は

良くも悪くも人付合いは難しいと云う事か。

藤原定家は都に居てたぐい稀なる歌人「後鳥羽院」やその子で英邁な順徳院の歌を、新勅撰和歌集にどうしても入れたかったが果せなかった。承久の変の後に配流された身の後鳥羽院や順徳院の歌の採用は厳しい鎌倉幕府に配慮して、宮仕えの彼には出来ない相談だった。そこで岳父の山荘の襖を飾る私的歌集と言われる『小倉山百人一首』の撰歌を頼まれた折に掉尾（ちょうび）を飾る意味で九十九番と百番に両院の歌をいれて歌集を締め括（くく）った。

後鳥羽天皇の最後は承久の変の敗戦で隠岐へ配流される事によって劇的な終末となったが、出生や即位の歴史もまた劇的である。

上皇は高倉天皇（第八十代）の第四皇子である。つまり、平清盛の次女の建礼門院徳子と高倉天皇の間に生まれた第一皇子が壇ノ浦に於いて平家一門と入水された悲劇の安徳帝（第八十一代）だから、後鳥羽天皇（第八十二代）は腹違いの弟にあたる。

木曽源氏に都を追われ平家一門は安徳帝を奉じて西へ落ち延び都は天皇不在となった。それ故、のちに幼い後鳥羽天皇に都の新しい主としての出番が到来したのである。

その後に続く武家同士あるいは朝廷との勢力争いは小説以上に激動の連続である。

そんな出生と即位の経歴がある天皇には才能も勇気もあり隠れたシンパも多いので監視の目が特に厳

しかったに違いない。

配流されて後、隠岐院と称され、更に没せられると顕徳院と追号された。しかし其の後に種々の怪異が都に生じたので、怨霊のたたりと恐れる巷間の噂に朝廷は後鳥羽院と再度の追号がなされたという。

隠岐でお世話をしたのは土地の豪族村上家である。京都とのパイプ役、海上交通の要衝として財をなし、江戸末期には三井、鴻池と比肩する長者として番付に天野(海士の)助九郎として長らく名前を連ねた。

百人一首には流刑された政治家・学者・歌人の小野篁（参議篁）も選に入って居る。

遣唐副使に選ばれたが、当時の舟と航海技術や気象知識での渡唐は命がけの事で、二度の渡航失敗を重ね、三度目の前に正使の藤原常嗣が破損続きの自分の舟と副使の舟との交換を仁明天皇に願い出て許可を受けてしまうと言う卑劣な工作に遭った。

不調な舟で長期の航海は危険極まりなく、わが身可愛さに常嗣が権力を弄した手段であった。藤原氏の全盛時代の事である。

篁は理不尽な駆け引きや朝廷トップの不明朗な措置に我慢出来ず、仮病を使って乗船を拒否、且つ遣唐使そのものを風刺した詩文を書いたのでその咎で官位を剥奪され、隠岐の島へ流刑される事となった。

その時の摂津（大阪）船出の時に歌ったのが…

わたの原　八十島かけて　漕ぎ出でぬと
人には告げよ　海人の釣舟

である。当時、都から隠岐へ行くにも摂津の国、難波の港から一部瀬戸内海を通る船旅であった。

古今集の詞書には「隠岐の国へ流されける時に、舟に乗りて出で立つとて、京なる人のもとに遣わしける」とある。広い海原を多くの島々を目ざし、舟をこぎ出して行ったと都の妻のもとへ告げておくれ。漁師の釣舟よ。と言った意味で、百人一首で広く知られた歌であるが、カルタ競技としては上の句の六字目でやっと取り札が決る六枚しかない札のうちの一枚である。

篁は学問の家として有名な小野姓で父も学者で参議であった。参議は位階でいえば、正四位の下、太政官の高官で閣僚クラス。

遣隋使妹子の子孫で、書で有名な小野道風も、六歌仙の一人で美人の誉れ高い小野小町も孫にあたると言われている。日本の最初の法典「大宝律令」もそれを補完充実させた「養老律令」も散逸して今は無いが、篁等が、養老律令の注釈書として編著して

現存している『令義解（りょうぎのげ）』により全貌が窺い知れるという。

昔から政治は権謀術数の世界、政敵、宿敵を無きものにする為に多くの貴族も流刑にあって居る。

歴史も海の幸もジオパークの地学や博物学などでも隠岐は興味深くて、前出のパンフレットにあった如く、**『世界ジオパークへ行ってこそ島根人』**は本当だと思った。もっと知ってみたい隠岐であった。

出雲空港・隠岐間プロペラ機

松江と隠岐の間を時速
７５ｋｍで結ぶ水中翼

野坂・新井姉妹（旧姓平石）

後鳥羽上皇を祀る隠岐

フェリー客室
四種の通船利用

地酒と海の幸

左より大脇（５）西村（６）今岡（４）小林（６）石原（２）
新井（旧姓平石５）野坂（同８）小林（旧姓佐藤９）大野（４）

了